
Love letter

金本ちはや

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Love letter

【Nコード】

N9074A

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

お兄ちゃんが死んだ。知らせを受けたあたしは、お兄ちゃんの友人だという日高さんと一緒に、お兄ちゃんの暮らしていた街へと向かう。お兄ちゃんがあたしに遺したというものを、お兄ちゃんの奥さんから受け取るために。 【09/04/23/一部改訂】

1 お兄ちゃん(前書き)

この作品は、第一回ポケスペ小説大賞応募作品です。参加期間中、あたたかいご声援を下さったすべての方に、改めてお礼申し上げます。

1 お兄ちゃん

お兄ちゃんが死んだ。

あたしとは十歳違いのお兄ちゃんだった。優しくて、年の離れていたあたしを邪険にしたりせず、よく面倒を見てくれた。絵が巧うまくて、いつもスケッチブックに何か描いていたのを憶えている。

お兄ちゃんは、あたしが八歳のときに家を出ていった。

当時高校三年生だったお兄ちゃんは、大学進学のことでお父さんと揉めていた。お兄ちゃんは絵の勉強をするために美大に行きたがっていたんだけど、お父さんはそれを許さなかった。

結局、お兄ちゃんはお父さんと大喧嘩をして、高校卒業と同時に家を飛び出した。

それ以来、お兄ちゃんとは会っていない。

何度かあたし宛てに絵はがきが送られてきた。お兄ちゃんの絵が描かれた、あたしへの絵はがき。文章はいつもちよこつとで、「元気が？」だとか、そんな決まり文句のようなものばかりだった。

だけど、すごく嬉しかった。

お兄ちゃんが文章を書かない分、あたしは便箋を何枚も使って返事をした。あたしはお兄ちゃんと違って絵の才能なんてなかったから、その代わりに言葉でいろんなことを伝えようとした。あたしのことだけじゃなく、お父さんのこと、お母さんのこと、友達のこと。お兄ちゃんに、少しでも知ってほしくて。

それがちゃんと伝わったかどうか　あたしにはわからない。

お兄ちゃんが出ていって八年。ようやく、お兄ちゃんは帰ってきた。

死っていう、だれも望んでいなかった形で。

2 メッセージャー

蝉が鳴いている。

お兄ちゃんは、この音があまり好きじゃなかった。

蝉の声を聞いていると、なんだか無性に悲しくなってくるんだと言っていた。夏の間だけの短い命を震わせて鳴くような声が、耳の奥にこびりついて離れなくなるんだって。

今ならその気持ちができるような気がした。

焦げつくような陽射しのなか、あたしは汗を拭うこともできず、じつと立ち尽くしていた。隣に並んだお母さんが、すがりつくようにもたれかかってきて肩が重い。お母さんとは反対側に立つお父さんは、きゅつと唇を引き結び、目の前の光景を睨むように見つめていた。

お兄ちゃんが眠る棺が、黒い霊柩車の中に運びこまれていく。お兄ちゃんの遺体からだを火葬場まで送るために。

お兄ちゃんの葬儀は地元のセレモニーホールじゃなくて、家で行われた。お父さんとお母さんが、最後はせめて家から送り出してやりたいと言つて。

葬儀には想像していたよりもたくさんの方が集まってくれた。親戚以外にも、お兄ちゃんの同級生や、お世話になったという学校の先生が、お兄ちゃんを見送るためにやってきてくれた。

やがて霊柩車の扉が閉まると、パアンと甲高くクラクションが鳴った。出棺の合図に、蝉の声にまぎれるように響いていたすすり泣きが大きくなった。

お母さんが細い肩を震わせて、ますます強くしがみついてくる。引き絞るような細い嗚咽が微かに聞こえた。

お兄ちゃんの死に顔を思い出す。まるで気持ちよさげに眠っているだけのような、穏やかな表情を浮かべていた。あたしのなかにいる十八歳のお兄ちゃんよりもずっと大人びていた。だけど、確か

にあたしのお兄ちゃんだった男の人。

ねえお兄ちゃん。

なんで死んじゃったの。なんで生きているうちに帰ってきてくれなかったの。なんで、なんで、なんで。

霊柩車が走り出した。もう二度と目覚めることのないお兄ちゃんを乗せて。

黒い影が門を抜けて、みるみるうちに小さくなっていく。陽炎のようにアスファルトから立ちのぼる熱に姿を揺らめかせながら、あたしたちから遠ざかっていった。

「行ったな……」

お父さんがぼつりと呟いた。その横顔は、一気に何十歳も老けこんでしまったようだった。

「……俺たちも行くのか。いつまでもここでこうしてるわけにはいかないからな」

お父さんの言葉に、あたしは頷くことしかできなかった。

のろのろと見送りの人々が動き出す。あたしもお母さんと一緒に家の中に戻ろうと踵かかとを返した、そのとき。

「二美花ちゃんふみか」

名前を呼ばれた。

振り返ると、そこにはお兄ちゃんと同じ年頃の男の人が立っていた。ひよろりと背が高く、癖っ毛のせいか整えているはずの髪がぼさぼさのように見えてしまう。

「日高さん……」

お兄ちゃんの大学時代からの友人だっという人。あたしたちにお兄ちゃんの死を知らせてくれたのが、彼だった。

「なんですか？」

「うん、ちよつと……話があるんだ」
話？

怪訝に思っ眉をひそめると、日高さんは困ったような顔をした。なんて切り出せばいいのか戸惑っているように見えた。

「二美花に話とは、なんですか？」

不意に、あたしと日高さんの間にお父さんが割って入ってきた。その顔にはわずかに警戒心が浮かんでいる。

日高さんはお兄ちゃんの死を知らせてくれたけれど、それだけの人だ。お兄ちゃんが死んで、お父さんは家族に対して過敏になっていた。

だけどあたしは、日高さんはそこまで心配しなくちゃならないよ。うな人だとは思えなかった。信頼というほどじゃないけれど、少なくともあたしに対してよからぬことをするとは考えてもいなかった。会ってたつたの二日だけれど、そう感じさせる人だった。何より……あのお兄ちゃんの友達なんだから。

日高さんは頭を掻くと、おもむろに口を開いた。

「一至いっしから、頼まれてたことがあるんです」

「お兄ちゃんから？」

お父さんが小さく息を呑み、お母さんがぴくりと肩を揺らしたのが、気配で伝わってきた。

「一至いっしが……何を？」

「あいつが、結婚をしているのはご存じでしたか？」

あたしは目を瞬かせた。

お兄ちゃんが　結婚？

「やっぱり……あいつ知らせてなかったんですね」

あたしたちの顔に驚きが浮かんだのを見て、日高さんは苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。

「一至いっしが……」

あたしの肩から顔を上げたお母さんが、茫然と呟く。日高さんは大きく頷いた。

「だ、だが、結婚してたつていうなら、どうしてその人は葬儀に来なかったんですか！」

噛みつくような勢いでお父さんが言った。

確かにそつだ。お兄ちゃんの奥さんならば、彼女こそがお兄ちゃ

んの死を伝えに、あたしたちに会いにくるべきなんじゃないんだろ
うか。

すると、日高さんは表情を曇らせた。

「彼女は綾羽あやばさんは今、入院してるんです。もともと病気がち
だったんですけど、一至が死んでからは病状が悪化して……」

「そんな……」

「本当は自分が行けたら一番いいのに、一至のご家族には本当に申
し訳ないって言っていました」

日高さんの言葉に、あたしたちは何も言えなかった。

「それで……一至から、伝言を。二美花ちゃんに」

お父さんとお母さんがもう一度、こぼれ落ちんばかりに目を瞠っ
た。

あたしは思わず両手を握りしめた。

「二美花だけに、ですか？ 家族全員にではなく？」

「はい。あいつから、二美花ちゃんに。『渡したいものがある』と
「渡したいもの……？」

あたしが首を傾げると、日高さんは頷いた。

「それがなんなのか俺も知らないんだ。ただ、今は綾羽さんがそれ
を預かってる。一至はきみに、綾羽さんのところまで取りにきてほ
しいって言ってた」

あたしはごくんと唾を飲み下した。

お兄ちゃん、あたしに渡したいものって何？ あたしに綾羽さん
と会ってほしいの？

お兄ちゃん。

「どうする？」

日高さんが真剣な表情で訊いてくる。

「一至は、きみに全部任せるって言ってた。取りに行くのもいかな
いのも、きみの自由だって。ただ、綾羽さんはきみが来るのをずっ
と待ってる」

蝉の声が遠い。額に滲んだ汗が頬を伝い落ちていくのが、やけに

はつきりと感じられた。

「行くなら、俺が連れていくよ。……どうする？」

……お兄ちゃん。

もう会えない。手紙にこめたあたしの想いが伝わったかどうか、もう確かめられない。

だから。

だからせめて。お兄ちゃんの遺したものを、この手で受け取りたい。

お兄ちゃん。

「行きます」

日高さんの顔をまっすぐに見つめて、あたしは答えた。

「行きます。お兄ちゃんがあたしに渡したいっていうものを取りに綾羽さんに、会いに」

だから。

「連れてってください。あたしを、綾羽さんのところまで」

3 夢と痛みと

お兄ちゃん、絵を描く姿が好きだった。

お父さんやお母さんに隠れてこっそり練習しているのを、よく隣で見ている。睨むように紙面を見つめるまなざし。スケッチブックを抱えて、ちよつと丸まった背中。絵を描くとき、お兄ちゃんの周りの空気はぴんと張り詰めて、とても静かだった。聞こえるのはお兄ちゃんが鉛筆を走らせる音だけ。

真っ白な紙に鉛筆の繊細な線が刻まれて、ひとつの形を浮かび上がらせていく。まるで魔法のようだった。

何度かあたしの絵を描いてってねだったことがある。だけど小さかったあたしは長時間じつとしていることができず、すぐに動いてしまうので、お兄ちゃんはあまりあたしをモデルにしたがらなかった。

じゃあ二美花が大きくなって、ちゃんとおとなしくしてられるようになったら描いてやるよ

お兄ちゃんは苦笑混じりにそう言つと、あたしの頭を撫でた。その約束が果たされることは、もうない。

「 ちゃん、……二美花ちゃん」

だれかが呼んでいる。

あたしは目を開けると、ぼんやりと目の前にある顔を見つめた。

「 日高さん……?」

「 寝てるどころ、ごめんね。もうすぐ降りるからさ」

向かい側の座席に座っている日高さんは、軽く前に乗り出すような姿勢であたしの顔を覗きこんでいた。ちよつと長めの前髪に隠れがちな双眸が、困ったように細められている。一瞬、夢のなかで見

たお兄ちゃんの表情が重なった。

日高さんつて、苦笑いの仕方がお兄ちゃんに似ているかもしれない。覚醒しきつていない頭の隅でそんなことを考えていると、不意に気がついた。

顔が近い。

何気なくなんだろうけれど、近い。だって日高さんの睫毛がはつきりとわかってしまう。

眠気が一気にぶっ飛んだ。

「んなあつ!？」

あたしは女の子にあるまじき奇声を上げると、座席の背もたれの存在を忘れて思いつきり後退った。

次の瞬間、後頭部に鈍い衝撃。

「だっ!」

再び奇声。

「だ、大丈夫!？」

頭を抱えて呻くあたしに、日高さんは慌てたように声をかけた。

「大丈夫です……」

あたしはうつすらと涙目になりながら答えた。

何やってんだろう、あたし。間違いなくおかしな子だと認識されちゃったよ。

なんだか虚しい気分になって、あたしはこっそりとため息をこぼした。

あたしは日高さんとともに、名前も知らないローカル線の電車に乗っていた。行き先は、お兄ちゃんが暮らしていた街。

お兄ちゃんの葬儀のあと、渋るお父さんとお母さんを無理やり説き伏せた。翌朝、夜も明けないうちに家を出て新幹線に乗り、それから何本も電車を乗り継いで。車窓の外に視線を向ければ、とつくに陽は沈み、流れていく景色は夜の闇に染まりつつあった。

今は夏休みだから学校の心配はない。お兄ちゃんがあんなことになったから、休みに入る前に約束していた友達との予定も全部キヤ

ンセルしていた。

「……お兄ちゃんの奥さんって、どんな人ですか？」

気になっていたことを訊いてみた。

すると、日高さんは一瞬、なんとも言えない複雑な表情を浮かべた。

え？

「綾羽さん、か……」

どこか遠くを見つめてこぼすような、小さな呟き。日高さんは目を伏せると、うつすらと微笑んだ。

「病気がちつていうのは言ったよね。子どもの頃からずっと入院をくり返してたつて。そのせいかな。物静かで、穏やかな性格の人だよ」

あたしは思わず日高さんを凝視した。あの顔はいつたいなんだつたんだらうか？

「一至とはやつぱり病院で出会つたつて言つてたな。あいつがたちの悪い風邪引いて短期入院したときに、知り合いになつたつて」

お兄ちゃんが、入院。心臓がどきりと跳ねた。

お兄ちゃんは病気で死んだつて日高さんが言つていた。発見したときには、もう手の施しようがない状態だつたつて。

綾羽さんはどんな気持ちだつたんだらう。お兄ちゃんの命が残り少ないつて知つたとき。

日高さんは続ける。

「あいつが退院してからも、たびたび会つてたみたいだつた。……絵のモデルを頼んだり」

「お兄ちゃんが？」

脳裏をあ約束がよぎつた。もう二度と果たされない約束。

胸の奥が痛い。針に突かれたような痛みはたちまち広がつて、あたしの心を痺れさせていく。

「そうですね……」

どうして胸が痛むのか、声が震えそうになるのか、わからない。

あたしはそつと目を閉じた。

お兄ちゃん。

お兄ちゃんは、綾羽さんが好きだった？ 愛していた？

……当たり前じゃないか。

好きだったから、愛していたから、結婚したんだろう。それなのに、なんで今更そんなことを考えるの？

わからない。

だけど、ひとつだけ。

あたしは打ちのめされていた。どうしようもない、この事実。

閉じた瞼越しに日高さんの視線を感じる。何かを問いかけてくる

ような、物言いたげな視線。

あたしは彼の視線から逃げるように目を閉じ続けた。どうしてか、日高さんの瞳を見ることが怖かった。

結局あたしが再び目を開いたのは、目的の駅に着いてからだった。

4 心の行方

お兄ちゃんがあたしの本当の『お兄ちゃん』じゃないって知ったのは二年前、十四歳のときだった。

本当に偶然だった。たまたまお父さんの献血手帳を見たときあたしは目を疑った。

献血手帳に記されていたお父さんの血液型は、A型だった。

あたしとお母さんはO型。お兄ちゃんは、B型。

A型とO型の夫婦からは、A型かO型の子どもしか生まれえない。

現にあたしはO型だ。だけど、お兄ちゃんはB型だった。

あたしはそれまで、お父さんはお兄ちゃんと同じB型だと思っていた。他ならぬお父さん自身がそう言っていたのだ。

これは、いったいどういうこと？

あたしはお父さんとお母さんを問い詰めた。はぐらかそうとするふたりと口論にまでなったけれど、結局向こうが折れて真実を教えしてくれた。

お兄ちゃんは養子だった。あたしが生まれるよりもずっと前、なかなか子どもに恵まれなかったお父さんとお母さんが、どうしても子どもが欲しくて、身寄りのなかった孤児の少年を引き取った。

だからあたしとお兄ちゃんの間には、血のつながりは一切ない。

死ぬかと思った。

呼吸の仕方を忘れて、このまま窒息死するんじゃないかと思った。もしくは、心臓が止まってしまっくんじゃないかって。

だって、兄妹じゃない。なんて。

足元から地面が崩れて、深い闇の底に落ちていくような気分だった。十四年間疑いもせず信じていたものが、積み木の城を崩すように、あっけなく壊れていった。

子どもだったあたしから見ても、お兄ちゃんと、お父さんとお母さんの関係は、どこかぎこちなかった。不仲というわけじゃないん

だけれど、普通の家族間にある無条件の安心感のようなものが欠けていたように感じられた。

その原因は、たぶんお兄ちゃんが養子ということにあったんだろう。

だけど問題はそこじゃなかった。もしかしたら……それをもたらしたのは、あたしなんじゃないだろうか。

お兄ちゃんは、子どもが欲しくてもできないから養子に迎えられた。でも、あたしが生まれてしまった。血のつながらない養子と待望の実子。お父さんとお母さんの愛情は、どちらにも傾くことなく平等に注がれたんだろうか？

あたしはお兄ちゃんが大好きだった。お父さんよりもお母さんよりも だれよりもそばにいて、あたしのことを見てくれていたお兄ちゃんが、大好きだった。

でも、お兄ちゃんは？

お兄ちゃんはあたしのことをどう思っていたんだろう？ いつも見せてくれていたあの笑顔の下で、何を考えていたんだろう？

怖かった。

背筋がぞつとして、体中から血の気が引いた。今すぐこの世から消し去られてしまうような恐怖に心臓が縮んだ。

だから……手紙を書いた。絵はがきが送られてくるたびに、たくさんたくさん手紙を書いた。恐怖に呑みこまれたくなくて。疑惑を確信に変えてしまいたくなくて。あたしだけに送られてくる絵はがきをよすがに、お兄ちゃんの心を信じたくて、必死に。

それは傍から見ていて、さぞ滑稽だったろう。

お兄ちゃん。

あたしの心は届いていた？ 伝わっていた？

お兄ちゃんの心を信じてもいい？

……お兄ちゃん。

会いたいよ、無性に。

5 宿にて

お兄ちゃんが暮らしていた街は海のそばにあった。

日高さんの知り合いが営んでいるというこの旅館も、歩いてすぐのところには浜辺がある。ちょうど今の時期は海水浴客で賑わっているらしい。確かに旅館は満室状態で、小さいながらもふた部屋取れたことは奇跡に近かった。

あたしが泊まる部屋は浜辺に面していて、窓を開けると、墨をこぼしたような闇の向こうから波の音が聞こえてくる。あたしは転落防止の手すりに寄りかかり、近づいては遠ざかる海の声に耳を傾けていた。

潮の香りを運んでくる風は冷たく、べたついていて。髪や肌が痛むと言って海風を嫌がる人もいるけれど、あたしはそんなに嫌いじゃなかった。鼻につんと来る塩辛いにおいは、海にやってきたんだってという実感を湧かせるし、ひんやりとした冷たさは真夏の陽射しに灼けた肌には心地よかった。

お兄ちゃんも海が好きだった。

風景画を描くとき、題材はほとんど海だった。よく晴れた日の、透きとおるようできてどこまでも深い、青い青い海。突き抜けるような蒼穹の下に広がる海原は、紙の上に描かれた絵に過ぎないはずなのに、本当に波の音が聞こえてくるようだった。

海を見ていると懐かしくなるんだ
できあがった絵を見つめながら、ぼつりと呟いていたことがあった。

どうしてかな……とてもそこへ帰りたくなる

帰りたい場所。

帰りたいと思う場所 帰るべきところ。

お兄ちゃんの『帰るべきところ』は、あたしたち家族の許じゃなかったんだろうか。だから帰ってこなかった？

「……わかんないや」

考えても考えても答えにたどりつけない。まるで迷路の中を、出口を求めて歩き回っている気分。

思考の堂々めぐりに陥ってしまったあたしは、手すりの上に重ねた腕に顔を埋めた。なんだかもう、いろんなことが嫌になってしまった。

と、閉めきられた襖戸の向こうから声がかげられた。

「二美花ちゃん、ちよっといい？」

「あ、はい。どうぞ」

あたしは顔を上げると、慌てて返事をした。

一拍置いて、静かに襖戸が開けられる。現れたのは日高さんとその後ろにもうひとり、はじめて見る男の人。

「急にごめん」

「いいえ」

女のあたしの部屋に入るのにためらいがあるのか、日高さんたちは出入り口に突っ立ったままだった。あたしが部屋に入ってもらおうと言うべきか否か迷っていると、男の人が日高さんの肩越しにひよいつと顔を覗かせた。

「きみが一至の妹さん？」

「え？ はい、そうですけど……」

お兄ちゃんや日高さんと同じか、もう少し上くらいだろうか。短く刈った髪を薄い金色に染めて、両耳に銀のピアスをいくつもくっつけている。こんがりと灼けた浅黒い肌が、いかにも海辺育ちっぽい。

彼は一瞬目を瞠ったあと、感心したような声を洩らした。

「いやいやいや……ホントそっくりだねえ。まさか、ここまで似てるとは思ってなかったよ」

え？

なんのことかわからず目を瞬かせていると、日高さんが男の人の肩を小突いた。

「おい」

「あー、ごめんごめん。つい、ね」

似ているって、いったいどういうことなんだろう？ お兄ちゃん
と……というわけではないと思う。昔から、似ているなんて一回も
言われたことがない。血が繋がっていないんだから、あたり前な
んだけれど。

そんなことを考えていると、男の人につこりと笑いかけられた。
なんとなく近寄りたいたい印象なのに、思いがけず人懐っこい笑顔だ
った。

「はじめまして。俺、真柴康多ましばしやすと。ここの旅館のひとり息子で、徹とほや
一至の大学の同級生。よろしくね」

『旅館を営んでいる知り合い』というのは、この人のことだった
のか。ということは、今日この旅館に泊まれたのは彼のおかげなの
だ。あたしはぺこりと頭を下げた。

「杉村二美花です。今日は泊めていただきありがとうございます」
「いえいえ、どういたしまして」

見かけによらず……って言うのと失礼だけれど、意外と気さくな人
らしい。ほっとしたあたしは、無意識に強張らせていた肩の力を抜
いた。

「こいつが二美花ちゃんに会いたいわって急に言い出すもんだから」
真柴さんを睨みつけながら、日高さんは呆れたように言った。す
ると、真柴さんは大袈裟なほど悲劇的な顔をしてみせた。

「なんだよお、俺だって興味あったもん。あの一至の妹にい」

「他人様を珍めづ獣じゆみたく言うな！ ってかそのしゃべり方やめろ！

気色悪い！」

「うわっ、ひつでえ。徹とほってば」

……仲、いいんだなあ。

生あたたかい気持ちでふたりのやりとりを見つめていると、ハッ
とした日高さんが慌てたように咳払いをした。

「えっと、それで明日のことなんだけど。こいつが病院まで、車で

連れていくから」

「そういうこと。まあ、まっかしといて」

「あつ、はい。わかりました。よろしくお願いします」

明日。

明日、綾羽さんに会う。お兄ちゃんの遺したものを受け取るために。お兄ちゃんの本当の心を確かめるために。

すべての決着がつく。そう思うと、心がすうっと冷えていった。

お兄ちゃん。

あたし、行くよ。綾羽さんに会うよ。お兄ちゃんが愛した人に。

……ちよつとだけ、怖い。

お兄ちゃんがあたしをどう思っていたのか、知るのが怖い。でもね。

それでも、それでも知りたいから。だから、あたしは行くよ。

闇の向こうから聞こえてくる波の音が、いつまでも耳の奥で鳴り響いていた。

6 それは、偽りという名の(1)

昔から、病院というところはあまり好きじゃなかった。

まるで水底にいるような静けさ。薬品のおいが混じった、ひんやりとした空気。陽が射しているのにどこか薄暗い廊下を歩いていると、だんだん息苦しくなってくる。

「二美花ちゃん、大丈夫？」

隣を歩く日高さんが顔を覗きこんできた。

「え？」

「なんだか顔色が悪いよ。さっきからずっと黙りっ放しだし」

「……そうですか？」

だから、顔が近いんですけどば。

気遣わしげに訊いてくる日高さんに曖昧な笑顔を返しながら、あたしはさり気なく彼と距離を取った。

癖なんだろうか。日高さんは人と接するとき、相手の距離をあまり考えていないことが多い。今だって間近で見つめてきたりする。

しかも無自覚だから、尚更たちが悪い。

「まあ、確かにこんな心気くせえとこにいれば気持ち悪くもなるよなあ」

あたしたちの後ろを歩く真柴さんが、なぜかにやにやししながら呟いた。日高さんは眉間に皺を寄せる。

「おまえな、そういうこと言うなよ。ってか、なんでずっと笑ってるんだよ」

「別にい？」

にやにや笑いが、更に深まる。……明らかに「別に」っていう顔じゃない。

日高さんは何か(たぶん文句を)言おうとして、結局、長いため息をひとつ洩らした。

「……おまえと話していると、ホント疲れる」

ちよっぴり同意しなくなっただってというのは、真柴さんには内緒だ。

そうこうしているうちに、目的の病室にたどり着いた。スライド式のドアの横のプレートには、『407号室 杉村綾羽』の文字。受付で確認したとおりの部屋番号だ。

着いてしまった。とうとう来てしまった。

さっきの会話で浮いていた心が、一気に重くなる。なんだかよくわからない、いろんな感情が入り混じったものがこみ上げてきて、喉の奥が嘔吐したあのような、いやな感じになった。

だけど、行かなくちゃ。

日高さんがドアをノックする。

「綾羽さん、徹です。康多と……二美花ちゃんを、連れてきました」
しばらくして、やわらかな女性の声が返ってきた。

「どうぞ」

心臓がとどろいた。

このドアの向こうに、お兄ちゃんの奥さんがいる……。

「失礼します」

日高さんの手がドアにかかり、そして 開かれた。

あまり広くない個室だった。陽が射しこむ大きな窓があり、磨いたように青い空と お兄ちゃんが好きだった、真夏のきらめく海が見える。そのそばに置かれたベッドの上にいる線の細い女性と、視線が絡まった。

彼女の顔を目にした、その瞬間。

あたしは どうしようもないくらい、泣きたくなってしまった。

「……………はじめまして」

彼女も同じだったのだろうか。

その色の白い、……………あたしとそっくりな顔に、涙を堪えるような笑みを浮かべた。

どうしてだろう。あの、小さな頃にお兄ちゃんと交わした約束を思い出す。

じゃあ二美花が大きくなって、ちゃんとおとなしくしてられる
ようになったら描いてやるよ

お兄ちゃん。

お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん。

「一至くんの妻の……杉村綾羽です」

どこか、遠い場所で。

今、一番聞きたい声が、呼んでくれたような気がした。

7 それは、偽りという名の(2)

同じ顔の人が目の前にいるっていうのは、なんだか奇妙な気分だった。

綾羽さんはあたしよりもずっと年上で(たぶんお兄ちゃんと同じ年くらいだ)、病人だからか、折れてしまいそうなくらい華奢だった。髪の毛の長さも違う。でもその顔立ちは、まるで鏡に映したようにあたしと似ていた。血のつながりがないのが不思議なくらいだ。

この街へ向かう電車の中で見た日高さんの複雑な表情、昨夜の真柴さんの発言の理由が、やっとわかった気がした。

「……びっくりしたでしょう?」

パジャマの上に薄手のカーディガンを羽織った綾羽さんは、困ったように微笑んだ。なんていうか、あたしよりもずっと優しい表情かおをする人だ。

あたしと日高さんと真柴さんは、病室に備えつけられていたパイプ椅子を引っ張ってきて腰かけていた。綾羽さんは上体だけ起こして、枕をクッション代わりに背中に当てていた。

開け放たれた窓から生ぬるい風が吹きこんでくる。そこに潮の香りを見つけることはできなかった。

「わたしも、知っていたけど、驚いたわ。こんなにそっくりだったなんて……」

ため息をつくような声。あたしはきゅっと拳を握りしめると、綾羽さんに尋ねた。

「あの」

「なんででしょう」

「知っていたって……兄は、その、あたしと似てるってこと、言っていたんですか?」

隠していたとばかり思っていた。だって……普通は言えないじゃない。あなたは私の妹にそっくりなんです。なんて、そんなこと。

「ただ、綾羽さんの答えは違っていた。

「教えてもらいました、何もかも。最初から、出会ったばかりの頃に」

それは。

彼女はいつの間にか、自嘲するような笑みを浮かべていた。

「二美花さん。わたしは、……あなたの身代わりだったんですよ、身代わり。」

聞き慣れないその言葉に、あたしは思わず息を詰めた。

「一至くんの心は、いつもあなたに向いていました。わたしが入りこむ隙なんてないくらいに。彼はわたしを通して、あなたを見ていました。でも、わたしはそれでもよかったです。わたしは一至くんを愛していたから」

綾羽さんは、そつと目を伏せた。色素が抜け落ちたように青白い頬に落ちる睫毛の影は、あたしよりも長かった。

「妹さんの代わりでもいいからそばにいらさせてほしいって、わたしから言ったんです。彼は優しいから……そしてあなたの面影を求めていたから、わたしの願いを聞いてくれたんだと思います」

そんなの。

そんなのって、あんまりだ。

悲しくて、虚しいだけじゃない。そばにいたって、苦しくて、つらくて、傷つくだけじゃない。

それなのに、どうして？

「……兄は、あなたを愛していたんじゃないんですか」

掌にぴりつと痛みが走った。拳を強く握りしめすぎていたせいで、伸びた爪が皮膚に食いこんで血が滲んでいた。

「二美花ちゃん、手……」

それまで黙っていた日高さんが驚いたような声を出した。

「大丈夫です」

我慢できないほどの痛みじゃない。みんなの目から隠そうと手を引っこめようとしたけれど、それよりも一瞬早く、綾羽さんに手首

を掴まれた。

「ちゃんと手当てしなきゃダメよ」

彼女はまるで自分が怪我をしたような顔をしていた。

「康多くん。床頭台しょうとうだいの一番下の引き出しに救急箱が入ってるはずだから、取ってくれる？」

「おっけー」

真柴さんはひょいっと椅子から立ち上がると、言われたとおりに引き出しを開け、小ぶりの救急箱を取り出した。

「あいよ」

「ありがとうございます」

綾羽さんは救急箱を受け取ると、中から消毒液と絆創膏を取り出した。床頭台の上のティッシュを取り、傷口の周りを拭ってから、容赦なく消毒液をぶっかける。

「いつ……!!」

さつきよりも数倍の痛みに、思わずあたしは声を上げた。綾羽さんはてきぱきと手当てを進め、最後に大判の絆創膏を貼った。

「はい、終わり」

「あ……、ありがとうございます」

「どういたしまして」

救急箱の蓋を閉めながら、彼女はにっこりと微笑んだ。だけど、たちまち陰りを帯びる。その視線が再び下を向いた。

「さつきの質問、まだ答えていませんでしたね」

綾羽さんは救急箱の把手を指先でいじりながら、呟いた。

「……その愛はきつと、わたしの欲しかったものじゃありません。だって 一至くんが『愛していた』のは、あなただもの」
愛していた。

その意味を自分自身にごまかすことは、できなかった。

「あなたに、お渡しするものがあります」

綾羽さんは顔を上げると、あたしをまっすぐ見つめて言った。

「受け取ってもらえますね？」

Love letter

「それは問いかけじゃなく、確認だった。」
「はい」
あたしは頷いた。

8 そして約束は果たされる

綾羽さんに手渡されたのは、一通の手紙とひとつのキャンバスだった。

飾り気のない封筒の表には、懐かしい筆跡で『二美花へ』と書かれている。裏をめくると『一至より』の文字。

お兄ちゃんからの、最後の手紙だ。

そして、キャンバスには。

「これ……」

あたしは言葉を失った。

そこに描かれていたのは、ひとりの少女だった。入道雲が浮かぶ夏空と波頭のきらめく海をバックに、屈託のない笑顔をこちらへ向けている。彼女が立っているのは、波の打ち寄せる白い砂浜だ。

少女はあたしと同じ顔で笑っていた。

「……綾羽さん？」

「いいえ、これはあなたです。ちょうど同じ年頃でしょう？」

確かに、言われてみれば少女は十六歳。あたしの年齢ぐらいに思える。その笑顔も、綾羽さんが浮かべるガラス細工のように繊細なものじゃなくて、年相応の快活な表情だった。

「向日葵みたいだね」

あたしの後ろからキャンバスを覗きこんだ日高さんが、ぽつりと呟いた。

「その絵は、一至くんがわたしを参考にして描いた、あなたの肖像画です」

綾羽さんの言葉に、あたしはハッと息を呑んだ。

彼女はほのかな笑みを浮かべた。それは過去を懐かしんでいるようにも、悲しんでいるようにも見えた。

「わたしと一至くんのはじまりは、それがきっかけだったんです。

『モデルになつてくれないか』って声をかけてきて……。彼が本当

はだれを描こうとしていたのかを知ったのは、ずいぶんあとになってからですけど」

「……約束したんです」

あたしはぎゅっとキャンバスを抱きしめた。

目の奥が熱い。じわりと視界が滲んで、歪んでいく。

お兄ちゃんの死を知った瞬間凍りついたものが、ゆるゆると溶かされていく。まるでキャンバスが燃えているように、その熱に冷たい氷は崩れて、溶け出した水は涙になって体から溢れた。

「いつか、あたしが大きくなったら……絵を、描いてくれるって……」

最後は言葉にならなかった。

唇が震える。喉の奥が引きつって、掠れた嗚咽がこぼれた。

ずっと、ずっと不安だった。

お兄ちゃんはあたしのことをどう思っていたんだろう。嫌いだったんじゃないか。憎かったんじゃないか。お兄ちゃんの居場所を、あたしは奪ってしまったんじゃないだろうか。

だから、……家を出たんじゃないだろうか。

怖かった。

気まぐれに送られてくる絵はがきにすぎるように、たくさん、たくさん手紙を書いて。お兄ちゃんにあたしのことを知ってほしくて、嫌いになってほしくなくて。

だって、あたしは。

あたしは、お兄ちゃんのことを、好きだから。

お兄ちゃんのことを、好きだから。

ねえお兄ちゃん。

今ならわかるよ。

あたしはずっとずっと昔から、あなたに恋していたんだ。その優しさに、その笑顔に、そのぬくもりに、恋していたんだ。

だからこんなにも、あなたがいなくて悲しい。さびしい。

涙が止まらない。

ねえお兄ちゃん。

なんで死んじゃったの？　なんでいなくなっちゃったの？　なん

で　何も言ってくれなかったの？

お兄ちゃん。

お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん……お兄ちゃん。

どうした、二美花

思い出の中の、お兄ちゃんが甦る。

幻だっという。

お兄ちゃんに会いたい。声が聞きたい。抱きしめてほしい。

でも　叶わない。

窓から吹きこんでくる風が頬を撫でていく。それはどこか、もう

二度と触れることのない、お兄ちゃんの指先のように。

あたしは小さな子どものように、声を上げて泣いた。

9 s o i d o n ' t s a y " I l o v e y o u " .

『二美花へ』

おまえにこうやって手紙を書くのは、これがはじめてだな。

俺はあんまり文章がうまくないからさ。どんな言葉を選べばいいのかさっぱりわからない。だからいつもいつも、絵はがきばかりになっちまう。

おまえはたくさん手紙を書いてくれたのにな。おまえのこと、親父のこと、おふくろのこと。学校のこと、友達のこと、先生のこと。いろんなことを書いてくれたよな。一生懸命書いてくれたんだろう？ 嬉しかった。

おまえが俺を忘れずにいてくれて。おまえの成長を知ることができて。本当に本当に、嬉しかった。

なあ二美花。

俺はどんなにおまえに救われたんだろう。どんなに癒されたんだろう。言葉じゃ言い尽くせないくらい、俺はおまえの存在に助けられて、支えられて、生きてるんだ。

……何を勝手なことを言ってるんだと、おまえは怒るかもしれない。

それでもかまわない。この手紙は俺の自己満足な懺悔だ。破り捨ててもいい。燃やしたっていい。だけど、わがママを言ってもいいなら、どうか最後まで読んでほしい。

二美花。

おまえが生まれたときのこと、今でもよく憶えてるよ。その年は例年よりもあつたかくて、まだ三月なのに桜の花が満開だった。お

まえの生まれた病院に大きな桜の木があつてな。病室の窓からきれいなピンク色がよく見えたんだ。「まるでお祝いしてくれてるみたいですね」って、看護婦さんが笑つてた。

俺は、生まれたばかりのおまえが、憎くてしょうがなかった。小さなおまえを抱いて幸せそうな親父とおふくろが、恨めしくてたまらなかつた。

二美花、俺はな。俺は、おまえの本当の兄貴じゃ、ないんだよ。とつくに知ってるかもしれないな。おまえももう十六なんだから俺は養子なんだよ。六つするとき、親父とおふくろに引き取られたんだ。

本当の両親は、俺が三つのときに交通事故で亡くなった。顔はぼんやりとしか思い出せない。でも優しい人たちだったような気がする。

両親には身寄りがなかつたみたいだった。引き取ってくれる親戚もなくて、杉村の家にもらわれるまで俺は施設で育つたんだ。

施設にいたのはたった三年間だけど、あんまり思い出したくないな。周りになじめなくて、いつもさびしくて泣いてばかりだった。

……杉村の家に養子に行つても、それは変わらなかつた。

親父とおふくろには本当に感謝してる。血のつながらない俺を育ててくれて。なんにも恩返しできないまま勝手にくたばつちまつて、本当に申し訳ないって思つてる。

俺は親父とおふくろのことを『両親』だつて、ずっと認められなかつた。

俺にとつての『両親』は本当の父さんと母さんだけなんだ。臍げにしか憶えてなくても、俺の心のなかには確かにふたりがいるんだよ。

だから いつもどこかが噛み合わなかつた。

お互いに家族になろうとしても、完全にはなりきれなかつた。俺が最初から一線を引いてたせいで、親父たちも踏みこむことができなかった。

失敗してたんだ、俺たちは。

それでも、おまえが生まれるまでの四年間はまだなんとかなった。ぎこちなくても『家族』っていう形を取り繕うことができた。親父とおふくろの優しさや愛に、甘えたり、応えたりすることができた。だけど、おまえが生まれて。

状況は変わった。親父とおふくろは俺もおまえも同じくらいかわいがってくれたけど、でもやっぱり違うんだ。目に見えるような、形のはつきりしたものじゃなくて、何げない態度とかかける言葉とか、そんな小さなことから伝わってくるんだ。養子の俺よりもあきらめてた矢先に生まれたおまえのほうが、何倍も大事にされてるんだって。

俺はおまえを妬んだ。俺から仮初めの家族すら奪うやつだって憎んだ。

本当に勝手だろう？ 自分から与えられた居場所を捨てておいて、居場所を奪っただなんて考えて。本当に、呆れるくらい自分勝手なやつだ。

そして卑怯だ。

俺は子どもが欲しくてもできないから、親父とおふくろに引き取られたんだ。それなのにおまえが生まれちゃった。もう必要ないって捨てられるかもしれない。そんな不安や恐怖が頭から離れなかった。

俺は本心を親父たちに悟られないよう、今まで以上に『いい子』を演じた。賢くて素直な、理想を絵に描いたような『いい子』をな。赤ん坊だったおまえの面倒も、自分から進んで見たよ。それこそ、おむつ替えからミルクを飲ませてやることまで、なんでもやった。小学生で離乳食が作れたやつなんて、俺以外にはそうそういないと思うぞ？

そんな俺をおふくろはすっかり信頼して、おまえのことを任せっきりにするようになった。俺もいつの間にか、この世で一番憎い『妹』の世話をすることが当たり前になってた。

そう、当たり前になつてたんだ。

面倒を見るようになったばかりの頃、そのふにゃふにゃした首をへし折りたぐらいたつたのに　気づいたら、おまえのことがかわいくてしょうがなくなつてた。

どうしてなんだろうな。

憎くて妬ましくて殺してやりたい、そんなどろどろした醜い感情を抱いてた俺に、なんの屈託もなく笑いかけてくれたからだろうか。薄汚れた俺の指を、小さな手でぎゅっと握ってくれたからだろうか。おふくろでも親父でもなく、一番最初に俺を呼んでくれたからだろうか。

……いや、そうじゃない。もっと根本的な部分で、俺は、浅はかな期待を抱いてたんだ。

おまえは何も知らない。何も知らないからこそ、俺を……必要としてくれるんじゃないか、って。

血のつながりがないことを知らない、俺を本当の兄だつて信じてるおまえになら『家族』として愛してもらえんじゃないかって……遠い昔に失つちまつた居場所を、手にすることができんじゃないかって、思ったんだ。

おまえの目に真実は映らない。そうすれば、俺は真実を忘れられた。おまえの兄貴として、おまえのそばにいつまでもいることができた。

幸せだった。

とても、とても幸せだった。おまえに頼られて、甘えられて、必要とされて。「お兄ちゃん」って呼んでもらえて。「ここ」についてもいいんだって感じる事ができた。

おまえが俺のすべてだった。おまえが俺の存在理由だった。

二美花。

おまえはどうして俺が家を飛び出したのかって思ってるだろう。こんなにもおまえに依存しておきながら離れたのか、疑問に感じてるだろう。

美術系の大学に行くか行かないかで親父と揉めたことも、もちろんあった。だけど、何よりも、俺は。

怖かったんだ。

大きくなつてくおまえを見て、俺はいつしか気づいちゃまった。おまえはいつまでも子どものままじゃいられない。いつかは大人になつて、俺を必要としなくなる。俺の知らない世界に飛びこんでつて、手の届かない場所へ行っちゃまう。俺はそれを追いかけることはできない。

なぜなら、俺はおまえの『兄貴』だから。

やがておまえはだれかに恋をするだろう。結婚して、子どもを産むかもしれない。それはつまり、俺じゃない他の男を愛するっていうことだ。

……そんなこと、考えるだけでも耐えられなかった。

おまえが俺以外のやつを愛するなんて、絶対に許せなかった。腸が煮え返るぐらい腹立たしくて、まだいもしないおまえの恋人が、夫が、八つ裂きにしてぶつ殺してやりたいくらい、憎くて妬ましかった。きつと赤ん坊のおまえに感じた憎悪や嫉妬よりも、何倍も激しくて深い感情だった。

そして、そんな自分に愕然とした。

こんなにもおまえに執着してたなんて、これっぽっちも自覚してなかった。当然のようにおまえは俺のものだつて考えてる自分がおそろしかった。

だから逃げた。

このままそばに居続けければ、俺はいつかおまえを壊しちゃまう。兄妹なんてことにはかまわずに、ただ自分のためだけににおまえを傷つけて、おまえだけには知られなくなつた真実を最悪の形でおまえに突きつけちまう。いや、真実さえも利用して。

そう思ったから　だから、逃げ出した。

おまえを守るためだなんて、そんなのは詭弁だ。俺はただひたすら自分のために逃げたんだ。おまえに嫌われたくなくて、憎まれた

くなくて、拒まれたくなくて。もう二度と修復できない破綻を迎えるくらいなら、優しい兄貴のまま、おまえから離れるほうがマシだった。

その、はずだったのに。

二美花……。俺はどうしようもないくらい利己的で欲深い、醜い男だ。欲望に負けて他人を利用するような、最低野郎だ。

綾羽は、おまえじゃないのに。

俺は彼女の気持ちを利用したんだ。おまえの代わりでもいいっていう彼女の願いを聞き入れるフリをして、本当は、彼女の想いをだしにしてたんだ。

おまえの代わりなんて、だれにもできないって、最初からわかってたのに。

俺は、馬鹿だ。

ごめんな、二美花。

俺は本当に悪い兄貴だ。いや、もうおまえの兄貴なんて名乗る資格はないのかもしれない。俺は、おまえにとっていい兄貴として在りたかったけど……。本当は俺のように、おまえのすべてであってほしかったのかもしれない。

だけど、二美花。

おまえには、俺なんかに関われずに広い世界を見てほしい。ちっぽけな箱庭なんかじゃなくて、見渡す限りの風景をいつもその目に映してほしい。押しつけられた愛情や幸せなんかじゃなくて、おまえ自身の手で勝ち取ったもので満たされて幸せになってほしい。だから、この言葉は言わない。もうわかっちまうかもしれないけど、言わない。それはきつとおまえにとって、余計な足枷にしかないから。

代わりに、こう言おう。

幸せになれ。

世界中の人間が羨むくらい幸せになれ。俺のことなんか忘れちまうくらい、いい男を愛して、家庭を築いて、幸せになれ。

おまえが笑っててくれることが、今の俺のたったひとつの願いだ。

だいぶ長くなっちゃったな。こんなに文章を書いたのは、たぶん生まれてはじめてだ。

この手紙と一緒に綾羽に預けた絵、わかったか？

約束したからな。

気に入らなければ、燃やすなり捨てるなりしてかまわない。それはおまえの自由だ。

最後に。

ここまで読んでくれてありがとな。親父やおふくろのこと、頼む。それから。

俺は おまえに出会えて、本当によかった。

じゃあ、元気だな。

さよなら。

一至より
『

10 ながい手紙

一生分の涙を流したような気がする。

あたしは腫れぼったい瞼の下から、膝の上に広げた便箋を見つめた。

ずっと手に持っていた部分にくつきりと指の形が残り、皺が寄ってしまっている。ところどころインクが滲んだり、うっすらとシミが浮かんでるのはあたしの涙の痕だ。

何度も何度も読み返した。ひと文字たりとも漏らさないように。お兄ちゃんの想いを、ひとかけらも取りこぼさないように。

この気持ちを、なんて言葉にすればいいのかわからない。

これ以上ないってくらい嬉しいのに、どうしようもにくらい悲しい。時間が経てば経つほど想いは膨れ上がって、抑えきれなくなつて、吐き出さずにはいられない。

今もまた、目の奥がじわりと熱くなった。あたしは涙がこぼれる前に目を閉じて、ぎゅっと瞼に力をこめた。

「……二美花ちゃん」

心配そうな声で日高さんが名前を呼んだ。

あたしは顔を上げると、手の甲で目元をこすった。

「あの、さ……」

向かいの座席に座った日高さんは、まるで怪我をしたような顔をしていた。どんな言葉をかければいいのか迷っているようだった。

あたしはごまかすように笑ってみせた。

「ごめんなさい、大丈夫です」

「……そっか」

日高さんはそれだけ呟くと、結局何も言わなかった。あたしには、それがとてもありがたかった。

病院から宿に戻ってきたあと、もう一泊して翌朝に発った。真柴さんに見送られながら電車に乗って。行きとは逆の順に電車を乗り

継ぎ、あと少しであたしの街の駅に着く。

車内はやけに静かで、規則的なレールの軋みだけが響いていた。たまにひそひそと、他の乗客のささやき合う声が微かに聞こえる。車窓の外は、いつかと同じように真っ暗だった。照明の光を受けて車内の様子がモノクロ写真のように浮かび上がる。

窓ガラスの表面に映る自分と目が合った。

ひどい顔。

思わず笑ってしまいたくなるくらい、情けない顔だった。お兄ちゃんがいたら、「不つ細工になってるぞー」って苦笑しながら頭を撫でてくれたかもしれない。

お兄ちゃん。

ああ、もういないんだって実感するたびに、ぽっかりと胸に穴が開いたような虚しさときびしさがかみ上げてくる。壊れたものが元には戻らないように、喪われた人は帰ってこない。どんなに目を瞑って耳を塞いでも、お兄ちゃんの不在は永遠に覆えらない。

残されたあたしに許されたのは、それを受け入れることだけだ。

どんなに時間をかけてでも、お兄ちゃんの死を認めて乗り越えなくちゃいけない。生きている限り、あたしは　あたしたちは、前に進まなくちゃいけないんだから。

もう一度便箋に視線を落とす。ずっと求めていた答え。八年分のお兄ちゃんの想いが綴られた、ながいながい手紙。

ずいぶん自分勝手だけれど、こめられた想いの重さも、かかった年月の長さも、そしてお兄ちゃんの最後の願いも、今のあたしには上手に受け止められない。「幸せになれ」っていう言葉に頷くためには、もしかしたらこの手紙が届くまでの年月……ううん、それ以上かかってしまうかもしれない。

それでも。

いつか、お兄ちゃんに胸を張って「あたしは幸せだよ」って言いたい。お兄ちゃんと同じくらい好きな人と一緒に、いつも笑ってるって報告したい。

それがあたしにできる、お兄ちゃんへの恩返しだから。

お兄ちゃん。

たくさん、たくさん愛してくれて、本当にありがとう。あたしも、
とっても幸せだったよ。お兄ちゃんと一緒にいられて、毎日が嬉し
くて楽しくてしょうがなかった。言葉なんかじゃ言い尽くせないぐ
らい、幸せでした。

あたしがお兄ちゃんの許に行くのは、ずいぶん先のことになると
思います。だからどうか、気長に待っていてね。

そしていつかそのときが来たら、あたしのお話を聞いてください。

あなたへ綴ったラブレターのような、ながいながい、あたしの物
語を。

Love letter

番外編 ガラスの海（前書き）

サイトのWeb拍手で掲載していたSSです。

番外編 ガラスの海

はじめて海を見た妹の第一声は、「ガラスみたい」だった。

これを聞いた両親は、揃って怪訝そうな顔をした。それはそうだが、普通、海からガラスを連想したりなんてしない。

「なあ二美花。どうして海がガラスみたいなんだ？」

親父の問いかけに、それこそ妹は不思議そうに首を傾げた。

「だってきらきら、おんなじだよ？」

お父さんこそ、どうしてわからないの？ と言わんばかりの妹のまなざしに、親父は心底困ったような顔をした。

けれど、俺にはわかった。

つい先週の日曜日、両親が留守にしている間に家のすぐ近くでトラックの横転事故があったのだ。トラックにはガラス板が積まれていて、事故の衝撃で粉々に砕け散ったガラス片が道路一面に散乱していた。

俺は妹を抱いて、二階のベランダからその様子を見ていた。夏の明るい陽射しを弾いて、ガラス片がいつせいに瞬いているように輝いていた。よく晴れた日の、波頭がきらめく海のように。

妹はその光景を思い出して、海をガラスのようだと言ったに違いなかった。

「そうだな」

俺は妹の頭をひと撫ですると、ぱつちりとした目を覗きこんだ。

「きらきら光ってて、同じだな」

「うん！」

俺の言葉に、妹は本当に嬉しそうに、まぶしいほど無邪気に笑った。

その瞬間、圧倒的な歓喜がこみ上げてきた。甘く、やわらかな感情が俺を呑みこむ。気づくと唇が綻んでいた。

「一至、二美花が言ってる意味、わかるの？」

目を瞬かせながら、おふくろが訊いてきた。
俺は頷いた。

「わかるよ」

「あら、すごおい。教えてくれる？」

俺はちらりと妹を一瞥した。妹はきよとんと見返してくる。

それからおふくろに向かって、わざとらしく人指し指を唇に当ててみせた。

「内緒」

思えば、あのときにはもう、俺は愛と呼ぶにはおこがましい、狂
気じみたこの想いに囚われていたのかもしれない。

渴望し、だが決して叶わない苦しみを抱え、それでも俺は幸せだ
った。

その事実だけで、俺は充分だから。

だからこそ、本当に伝えたいことは伝えずに行く。

狂おしいほどの想いも、記憶のなかの笑顔も、すべて抱えて還る
う。

いつか見た、ふたりだけのガラスの海へ。

Love letter

番外編 2 待ちぼうけ（前書き）

サイトのWeb拍手で掲載していたSSです。

番外編2 待ちぼうけ

小さな頃、誕生日が近づくとびに何よりも待ち遠しかったのは、真つ赤な母が乗ったバスデーケーキと お兄ちゃんからのプレゼントだった。

子どものお小遣いで買えるものなんてたかが知れている。お父さんやお母さんからのものに比べたら、本当にささやかなプレゼント。それでも、あたしにとっては一番の贈りものだった。

どんなものだったかまわなかった。お兄ちゃんがあたしの誕生日を祝って、あたしのためにプレゼントを用意してくれた。そのことが、嬉しくて嬉しくてしょうがなかった。

お兄ちゃんがあたしの生まれたことを喜んでくれている。そう思うことができたから。

八歳のときにお兄ちゃんが家を出ていったからは、その形が変わった。プレゼントの代わりに送られてくるようになったのは、お兄ちゃんお手製のバスデーカード。お兄ちゃんの描いた絵と、お兄ちゃんらしい素っ気ない、けれどあたたかい言葉が綴られた、世界でたった一枚のカード。

誕生日の朝、郵便受けの中にバスデーカードの入った封筒を見つけた瞬間の、泣きたくなるような安堵と 歡喜を、今でも憶えている。

ああ、まだ大丈夫。

あたしとお兄ちゃんはまだつながっている。幼い日、誕生日おめでとうって言うてくれたお兄ちゃんの写真を見ていられる。

バスデーカードを見つめながら、何度も自分に言い聞かせた。

どうして気づけなかつたんだろう。

いつそ盲目的なまでの、その想いの真実に。

夏が過ぎ、季節がめぐって。

あたしはまたひとつ、年を重ねた。

もうお兄ちゃんからのバースデーカードが届くことはない。

ああ、そうかつて気づくたびに、お兄ちゃんの死を思い知らされる。喪失の、途方もない重みを。

お兄ちゃん。

今なら、お兄ちゃんがあのバースデーカードにどれだけの想いをこめてくれたのか、わかるよ。もしもあの頃理解できていたら

あたしたちの結末は、もっと違うものになっていた？

そんなこと、いくら考えたって何にもならないってわかっている。でもね、考えられずにはいられない。

本当に馬鹿だよね。

もう二度と送られてくることのないバースデーカード。

それでもきつと、誕生日を迎えるたびに、あたしは郵便受けを覗かずにはいられないんだ。

Love letter

番外編3 夏の果て（前書き）

旧サイトのリクエスト企画作品です。リクエストしてくださった読者の方に捧げます。

番外編3 夏の果て

夏の空は、ありつたけの絵の具をぶちまけたように鮮やかだった。ざらついた潮風が頬を撫でる。呼吸をするたびに塩辛い香りが肺を満たした。

「お、絶好の海水浴日和だなあ」

車椅子を押してくれる康多こうたが声を上げた。少し後ろでパラソルを張っている徹とほが呆れたように尋ねた。

「まさか水着持ってきたのか？」

「いやいや、そんなナンセンスなことはしねえよ。時代は着衣水泳だろ！」

「……馬鹿だ、馬鹿がいる」

徹ちゃんてばひつどい、という大袈裟な泣き真似に思わず笑ってしまう。波打ち際に立った綾羽あやばも、白い日傘の下でくすくすと小さな笑みをこぼしていた。

「いいわね、気持ちよさそうで。わたしも一緒に泳ごうかしら」

「マジで？ 大っ歓迎！ って言いたいところだけど、綾羽ちゃんにはぜひビキ……」

「調子に乗るな、このセクハラ親父！」

スパアン！ と小気味いい音に続いて、派手な悲鳴が上がった。このふたりのどつき漫才は昔から少しも変わらない。

そう。何も変わっていない。

徹も康多も、俺がどんな人間なのか知っているはずなのに、変わらぬ態度で接してくれる。綾羽も笑顔を見せてくれる。

当たり前という、幸福。

俺には、そんな資格なんてありはしないのに。

「……いいな。俺も泳ぎたい」

群青色の空とともにどこまでも広がる海は、まるで両腕を差しのべて微笑む母親のようだった。打ち寄せる波の音が、おいでおいで

と優しくささやく。

あたたかい水の揺籃ゆりかごのなかで見る夢は、どんな色をしているの
だろう。

「また、泳げるさ」

一秒にも満たない沈黙のあと、康多が強い声で言った。震えを押
さえこんだような、声。

「現にこうやって外出許可下りてるだろ？ 最近調子もいいみたい
だしさ。まだ夏ははじまったばっかなんだ。あと何回だって来れる
だろ」

「……ああ、そうだな」

徹が頷く。

「次は泳げるよ。今度はテントとか持ちこんで、みんなで泊まった
りしてもいいよな」

「花火とかな！ ああつと、西瓜すいか割りも忘れちゃいけない」

「ふふ、なんだか子どもの頃みたい」

綾羽がくるりと日傘を回す。陽射しに輝くような白と、軽やかな
仕種がまぶしかった。

「海水浴なんて小さなときに一度しか行けなかったけど、よく憶え
てるわ。西瓜割りに挑戦したんだけど、目が回りすぎててんで的外
れなの。結局だれも割れなくて、切って食べたわ」

「そうそう。あれって結構難しいんだよね。割ったら割ったでま
たビミョーだし」

「確かに、西瓜割りのあとってかなり悲惨だよな……」

砕け散った赤い果肉が広がる惨状を想像したのか、徹が乾いた声
で呟いた。

まだあの家にいた頃、縁側に並んで食べた冷えた西瓜を思い出す。
親父は塩をかけるのがうまいと言って譲らなかったが、俺と隣にい
たあの子にはとうてい理解できなかった。種を上手に飛ばすことが
できなくて、悔しそうに丸い頬を膨らませていたあの子。

雨のように降り注ぐ蝉の声。日陰に泳ぐ風鈴の音。西瓜の水っぱ

い甘さ。

隣合う小さな体の、熱いほどだったためくもり。めまいのような感覚に、俺は固く目を閉じた。

二美花。

俺の妹。俺の世界。俺のすべて。

罪深いほど恵まれていくせに、俺が満たされることはない。

徹にも康多にも、綾羽ですら二美花の代わりになどなれない。偽りでもかまわないとほざいておきながら、醜悪で貪欲な本性はいつでもあの子を叫んでいた。

二美花が欲しい。二美花でなければ駄目なのだ。

友人たちの優しさであの子の思い出をなぞってしまう。綾羽の表情に、声に、成長したあの子の幻を探してしまう。

二美花、二美花、二美花！

徹に、康多に　綾羽に。おまえたちに会うために生まれてきたんだと笑って言えたら、どんなによかっただろう。

この想いを忘れてしまえば、だれもが楽になれるのに。

目も耳も塞いで、それでも追いかけてくる面影すらいとおしい。

「一至くん、どうしたの？」

そつと瞼を押し上げると、気遣わしげに見つめてくる綾羽と目が合った。

「……なんでもないよ」

妻に重なりかけた姿をごまかすように微笑む。風が強くなり、いつそう潮の香りが濃くなった。

「康多、せつかくだから波打ち際まで行ってくれないか」

「オツケーオツケー、任しときんしゃい」

「タイヤを砂にはめるんじゃないぞ」

「……徹ちゃん。きみは俺をなんだと思ってるのかね？」

砂浜に笑い声が弾ける。まどろみを誘うような波の音に重なるそれが、ひどく心地いい。

心のどこかは常に渴き、飢えている。もう届かない存在を求めて

さまよっている。

けれど。

「ほい、っと」

ゆっくりと海が近づく。タイヤが波に触れるか否かのぎりぎりです。止まると、綾羽が日傘を差してくれた。

「まぶしいでしょう」

「……ありがとう」

彼女の向こうで、きらきらと海が瞬く。

けれど、愛していないわけではない。俺は幸せだ。

それだけは、嘘ではないから。

夏の空、夏の海。心まで真っ青に染まるような美しいブルー。

俺が残せるたったひとつの真実を置いていこう。

二度とめぐることのない、最後の夏に。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9074a/>

Love letter

2009年6月15日22時00分発行